

大極殿院の屋根の色

古代の屋根は何色だろうか。本稿はこのきわめて素朴な疑問に挑もうとする試みである。

屋根の色の復原材料は、絵巻物や文献資料を欠く場合出土瓦しかない。本稿では平城宮第一次大極殿院出土瓦で、奈良時代初期の6284C - 6664C等を対象に分析を試みる。この資料を特に取り上げるのは、これらの瓦が中国の重要宮殿にみられる黒色磨研瓦を模倣して黒色に焼かれたことを示唆する説があり(佐川 1992, p 8)、瓦の色自体に意味があった可能性があるためである。

そこで、第一次大極殿院出土瓦の色を分光測色計で測定し、客観的な値として瓦の色を表現する。以下に分析の方法と結果、問題点を述べる。

分析試料 第一次大極殿周辺では大極殿以外の建物の瓦が混入し、本稿の目的に適さない。分析試料は大極殿院南面築地回廊造営当初のものとみられる平城第360次調査の瓦溜りSX18585出土瓦とした(本書136~142頁参照)。

SX18585出土瓦中の丸・平瓦の総計は7295点、410.640kgで、このうちの3000点、177.163kgを無作為に抽出し、道具瓦、軒瓦については全点を対象とした。無作為抽出のため、表面状態が悪いものもかなり多く混じっている(丸・平瓦2647点、道具・軒瓦98点)。

測定方法 自然光を遮断した室内で、最小限の人工照明を一定量に保って測定した。測定機材はMINOLTA SPECTROPHOTOMETER CM - 2022である。測定部位は使用時に外側に露出する部分で、平瓦・軒平瓦平瓦部の凹面、丸瓦・軒丸瓦丸瓦部の凸面(軒瓦は一部、瓦当側面)、面戸瓦凸面、熨斗瓦側面、鬼瓦の文様面である。各個体の表面状態が最も良い部分を1点計測し、数量を重量で表現した。なお、平城宮出土瓦の色合いは、施釉製品等を除き大きく異なるものはなく、「灰色」の濃淡で表現することができる。そこで、色の明度(マンセル色計のVALUE値)のみに着目することとする。

測定結果 明度0.5ごとに重量の分布を示した。明度の数値は小さいほど黒い。表面状態の良いものが図37下で、それ以外も含めたのが図37上である。グラフのピークは図38の色見本の③に最も近く、③~④に分布の中心がある。なお、明度以外の要素も含めた色の平均は、マンセル

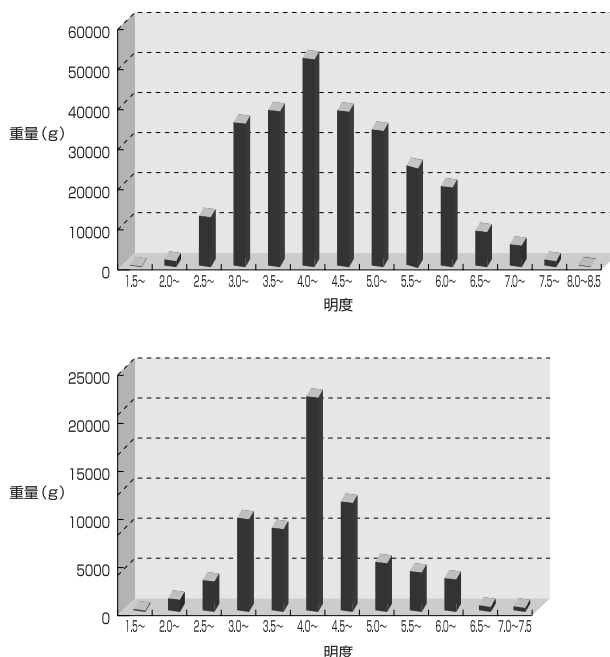


図37 瓦の明度と重量

上：表面摩滅したものを含む。下：表面良好なもののみ。

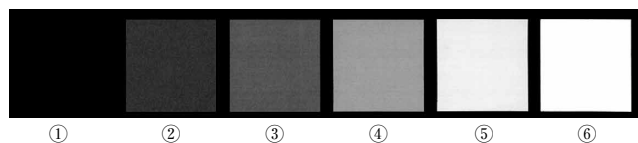


図38 色見本

ル表色計で6.54Y4.66/0.43である。

地葺と軒先・棟の色の差も考慮しておこう。表面状態が良好な試料の明度の平均値は軒瓦で3.88、熨斗・面戸瓦で5.69となる。図37下と比べて熨斗・面戸瓦の明度がやや高めだが、ほぼ分布の中央部分の前後に収まる。

筆者には黒っぽい灰色に見えるが、いかがであろうか。問題点 出土瓦から屋根の色を復原する上で最大の問題は、土中の様々な作用による瓦の変色である。これを克服するには、地下水位や土壌の酸性度等の諸条件が異なる資料、出土品以外の資料との比較をおこない、瓦の変色を検証する必要がある。今後の検討材料としたい。

分析に際しては浦奈穂美氏、片岡太郎氏、脇谷草一郎氏の多大な協力を得た。(清野孝之)

参考文献

佐川正敏1992「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える - 東アジアの造瓦技術の比較研究」『日本中国考古学会会報』第二号日本中国考古学会。